

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520394

研究課題名(和文) 琉球「通事書」写本群の本文校訂及び加點注釈の総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Revised Texts and Annotations of Tsujisho, the Manuscripts Written by Ryukyu Interpreters

研究代表者

木津 祐子 (KIZU, YUKO)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90242990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本国内に分蔵される琉球通事編纂の官話学習書(通事書)を広く調査収集し、その本文及び注文を解読し電子データ化するのが大きな柱であった。それを用いて通事書本文を分析した結果、琉球通事の中で鄭氏・蔡氏一族が官話学習上で重要な働きをしていたことが明らかとなり、現存テキストの中には彼らの官話学習の痕跡を残すものが存在することも判明した。また、琉球と長崎唐通事の通事書を比較した結果、両者は異なる言語アイデンティティを有し、実際に学んだ官話も異なる位相を示すことが明らかとなった。併せて、江戸時代の荻生徂徠が称した「崎陽之學」(長崎唐通事の唐話学)の実態を異言語習得の側面から分析した。

研究成果の概要(英文)：First, in this research project, Mandarin Chinese (Guanhua) textbooks, which were written by Ryukyu interpreters in the Qing dynasty (1636-1911), were collected from various libraries in Japan. These texts and explanatory notes were analyzed and annotated. Then, they were converted to electronic data for further academic research. The examination of these textbooks clarified that two families of Zheng and Cai were very important among Ryukyu interpreters. The evidences of their Chinese learning could be traced in the existing manuscripts. Two kinds of textbooks for learning Mandarin Chinese were compared: one was used in Ryuku and another was in Nagasaki. This analysis revealed that they had been different with respect to linguistic identities as well as the learning contents. Second, how was in practice "Kiyō no gaku" (Chinese studies of Nagasaki interpreters), which was named by Sorai Ogyū in Edo era, were investigated in terms of methodology for learning foreign languages.

研究分野：中国語学中国文学

キーワード：官話 通事 琉球 写本 長崎 荻生徂徠 清代 唐話

1. 研究開始当初の背景

清代琉球王国の久米村通事(移民華人の子孫が担った中国語通訳者)が官話(明清時代の共通中国語)学習の過程で編纂した官話資料については、近年中国など諸外国から大きな注目が集まっており、2013年に上海で出版された『琉球王国漢文文献集成』全36冊(復旦大学出版社)の内には、第33冊から36冊は、研究代表者の木津祐子が編集と解題執筆に関わった官話学習書類が収録されている(解題部分は未公開)。京都大学や国内各所の機関に、未整理のものを含め多くの資料が分蔵されている。従来の研究では、これらの資料を単に言語データとしてのみ扱い、成立の背景や、当事者であった通事の歴史的位置づけ、特に移民華人としての言語的アイデンティティの推移などの重要な問題について、総合的に考察することはまれであった。特に中国など国外での研究はその傾向が強く、通事書が著された意味や、伝えようとする事柄の文化的意味を、丁寧に考察する視点に乏しい。海外の研究者が言語資料として注目する今こそ、当該資料を所蔵する機関の研究者が中心となり、流伝の実態やテキストの編纂過程と目的などの根本的な問題を明らかにし、その資料的位置づけを明確にすることが求められる。

2. 研究の目的

この、琉球の久米村通事が官話学習の過程で撰述した資料群は、従来「官話課本」「官話教科書」という名称で呼ばれることが多いのだが、通事が撰述したこれらの書物は、単に官話教科書としてのみならず、より広い意味での啓蒙書、歴史叙述の筆記資料、公文書資料集としてなど、多彩な性格を有している。そのため、本研究では「通事書」という名称を用いて、その多様な性格を解明することを目指す。

これら「通事書」は、日本国内に写本によってのみ伝存する。それらを可能な限り収集して詳細な校訂を行い、さらに学習の痕跡である義注や音注などの注記類、校訂に属する書き込みなどを分析し、諸本巻の系統を明らかにする。また、幾つかの所蔵機関では、現在も未整理の資料が存在しており、その中から通事書に分類可能なものを発掘し、その書誌的研究を行う。資料の校訂と本文確定を通して、写本として伝わった通事書の資料的精度を高め、諸本間の個性を明らかにし、通事の職掌及び官話研究の深化に貢献することが期待できる。

データ整理と本文確定が終了した段階で、これら通事書の撰者や、学習者集団についても本文の記述に基づき考察する。官話の伝承者としての通事が、通事書を編纂した背景や目的についても解明する。

一方、琉球と同様に移民華人の子孫を母体とした通事集団が、江戸時代の長崎においても存在し、彼らも官話(唐話)学習の為の通

事書を多く撰述した。長崎と琉球とで、官話がそれぞれ如何にして受容されたか、中国語白話文(官話文体)を巡って、両者はどのような特質を有するのか、その共通点と相違点を分析する。さらに、彼らの異言語習得の方法を解明することによって、同時代日本に与えた学術的、言語文化史的影響についても新たな知見を提出する。

3. 研究の方法

琉球の通事書は、主に下の諸機関に所蔵が見られる。例を挙げると、

- ・天理図書館：『百姓』『学官話』『官話問答便語』『広応官話』『琉球官話集』『人中画』
- ・京都大学：『百姓』(二種類)『人中画』
- ・法政大学沖縄文化研究所：『官話問答便語』『広応官話』及び未完の稿本類
- ・東京大学：『人中画』
- ・関西大学：『百姓』『学官話』『中国語会話例文集』
- ・八重山博物館：『百姓』(二種類)『人中画』『官話』
- ・沖縄県立博物館：『百姓』

これら諸本の詳細な校訂と本文確定を行うために、資料を複製もしくは画像データによって収集し、そのテキストを電子データ化した。データ入力には、近世中国語の読解力を有する大学院生をオフィスアシスタントとして採用し、校正を重ね、正確な電子データとした。調査の中で、研究代表者木津祐子が国内研究員を務める法政大学沖縄文化研究所及び関西大学には、未整理の資料や新発見の通事書が複数存在することが発見された。それらの資料を、他の通事書に見られる特徴との比較を通して、年代推定や成立背景、また当該文献が有する性格についても基礎的考察を行った。

長崎唐通事の通事書もすべて写本によってのみ伝存する。これらについても同様の手法で収集と電子データ化を行った。

これらのデータをもとに、テキストから読み取ることのできる琉球久米村通事、さらに長崎唐通事の言語文化史的特質を明らかにし、両者の言語的特質を主に文法的側面から分析した。さらに、同時代の文献から両者に関する記述を有する資料を調査し、特に、江戸時代の学術に唐話学が与えた影響について考察を行った。

4. 研究成果

本研究の成果については、「5. 主な発表論文等」の「雑誌論文①②」「図書①～⑤」によって内容を(1)～(7)に分類し、それに関連する「学会発表①～⑩」を付す形で概説する。(1)京都大学文学研究科所蔵の『人中画』は最終巻に『百姓』を付す独特の形態を取る。本文テキストの綿密な分析を通し、『人中画』と『百姓』の成立が、18世紀初頭の鄭氏・蔡氏一族の官話学習と大きな関わりがあることが明らかになった。それによって、京大本

が、正に本文中に登場する鄭氏直系に連なる人物の旧蔵書であり、良好な書物の状態から考えても、現存諸本間において貴重な価値を有する写本であることを証明した。研究成果「図書」は、この京大本本文の影印と翻刻を行い、書誌及び研究成果を収めたものである。(関連研究成果「学会発表」)

(2)関西大学図書館長澤文庫にて、『中国語会話例文集』と名付けられた写本が発見されたのは2013年のことである。研究代表者木津は関西大学の国内研究員であるが、同図書館館長の内田慶市教授から、この新発見写本が琉球通事書ではないかとの相談を受けた。実見した所、まぎれもなく琉球通事書で、しかもこれまで全く存在の知られていないテキストであることが判明した。さらに、1:本文中に「大明」という呼称があること、2:通事の居住地「久米村」の中国語名「唐榮」は、清の康熙年間に「唐營」(中国人街)から表記を改めたものだが、本文中に、その古い「唐營」という表記が使われること、3:明の萬暦年間に初めて琉球に渡った新来の阮姓通事が登場すること、これらの事象から、本写本が明末清初に編纂された、現存する通事書の中で最も古いテキストであることが明らかとなった。この新発見資料については、内田教授が『中国語研究』55号に発表された。後に、研究代表者木津は内田教授との共著の形で、当該『中国語会話例文集』及び関西大学所蔵のその他通事書をまとめて影印・翻刻し、併せて解題と研究を付して公刊した(研究成果「図書」「学会発表」)。

(3)法政大学沖縄文化研究所は、沖縄のアメリカ統治期の文書を多く収蔵することで知られているが、近年になって、久米村通事の魏氏旧蔵の漢籍も多く保存されていることが知られ、その中に未完の通事書稿本が存在することが、筆者の調査により明らかとなった。それは書名を一部欠いていたため書籍登録もされていなかったのだが、『官音簡要揀選六條』と名付けるべきテキストであることを明らかにした。また、そのテキストが、清代に福建省にて出版された正音書(福建・広東の方言話者が官話の発音を習得する為に編まれた書物)の一つ、『新刻官音彙解釋義音註』(乾隆十三年1748序)の目次立てから、最初の6項目を完全に踏襲した構成を有することも判明した。沖縄文化研究所には、『新刻官音彙解釋義音註』の異なる3版がすべて収蔵されており、清代の久米村通事が官話学習の為に、中国福建で出版された「正音書」も利用していたことが、本研究によって証明された。(「図書」「学会発表」)

(4)同じく法政大学沖縄文化研究所蔵の『広応官話』についても調査を行った。『広応官話』は、天理図書館所蔵本が従来よく知られているが、法政大学本との間の校合は、これまで行われていなかった。今回の調査により、両者のテキストの特徴として、以下のことが明らかとなった。1:天理本は文末語気助詞

「呢」を用法上で区別していないのだが、法政大学本は、「呢」を疑問文でのみ使い、陳述の語気には「哩」を用いるなどの使い分けがある。2:天理本で見られる福建方言の量詞「兜」を、法政大学本は官話の量詞「顆」に改めるなど、天理本が有していた方言的色彩を、官話表現に改めたテキストを有する。また、その改訂されたテキストは『人中画』『百姓』にも共通する文法的特徴を有することから、撰者とされる梁允治が、『人中画』『百姓』の成立に関わった鄭氏・蔡氏両家(「図書」参照)と姻戚関係をもつ梁氏である可能性について、議論を行った(「雑誌論文」「学会発表」)。

(5)琉球通事と同様に、長崎唐通事も官話(唐話)学習の為に多くの通事書を撰述した。『瓊浦佳話』『譯家必備』などの主要な資料についても、琉球と同様に資料収集と電子データ化を行い、琉球と長崎との間で、文体と言語的特徴にどのような差異が見られるか、比較を行った。その結果、長崎唐通事も、明代以降の中国系移民がその母体であったが、朝貢国として直接中国への渡航が可能であった琉球と長崎との間で、通事の自己アイデンティティや中国語の位置づけの点で、大きな差異が存在することが確認できた。

琉球通事の祖先はすべて福建省出身であったが、彼らは正統的な中国語として官話の習得を求め、中華の文明に連なる立場を体現する為、価値観や倫理概念も中華に学ぼうと考えた。しかし長崎の場合はこうである。長崎唐通事は、南京・福州・泉州など出身地ごとにコミュニティを形成していたこともあり、まずは出身地の方言を重視する。しかし、新井白石の正徳新例後、南京船が急増し福建船が激減するなどの時代の遷移に従って、職務遂行上の官話(南京語)の重要度が拡大することとなる。その時、長崎唐通事は、方便としての通用語を学ぶという姿勢で官話を学んだ。琉球が正統を希求したのとは異なり、通用性が重視されたのだ。これらの事象は、すべて両者の通事書テキストに如実に語られる。両者の通事書本文から、中国語と自己との相対化の方式が読み取れるのである。さらに、本文の文法的特質も、両者間では異なっていたことから、当時の通用語である官話が、ある種の地域的リングフランカとして、複数のバリエーションを同時に許容するものであったと認めることが可能となる。「図書」は、上記の研究成果である。(関連研究成果「学会発表」)

(6)長崎唐通事の著した『瓊浦佳話』は、中国の話本小説・章回小説の文体的枠組みを非常に忠実に再現する。これら話本小説・章回小説は、中国では講談口調を保持するところに大きな特徴を有するが、『瓊浦佳話』は講談とは無関係の、すべて長崎に取材した叙事の文であるにもかかわらず、話本小説の枠組みを墨守して、その中に、通事職にあるものが教訓とすべき歴史や大事件を書き綴る。研

究成果「図書」は、このような長崎通事書の白話文を、異言語学習における模擬再生の実作と捉えることによって、通事書の性質を同時代的学問の潮流の中で分析したものである（関連研究成果「学会発表」）。

(7)琉球と長崎は、学んだ言語の実態こそ異なるものの、共に模擬再生によって異言語たる官話の習得に努めた。この長崎における官話（唐話）学習を、江戸では荻生徂徠が「崎陽の学」と呼び、日本の漢文学習の根幹であった訓読を否定し、新たな原典理解の方法を提唱するに到った。長崎の通事書と、荻生徂徠の原典習得理論を比較検討した結果、荻生徂徠が「崎陽の学」から学んだことは、従来考えられてきたような、訓読に抛らず漢文を頭からまっすぐに唐音（中国語音）で読み下すことではなく、以下の諸点がより重要であることが解明できた。1：音読ではなく黙読を推奨すること。2：中国語の俗語も、訓読と同様に冗長という欠点を有しており、その点では日本人も中国人も同じ弊害を抱えると考えたこと。3：冗長の弊害を克服し、真に古言と一体化するには、助字が少なく稠密な「古文辞」を学ぶしかないが、「古文辞」の文法構造を学ぶには、訓読も方便として利用価値があり、それを使うことができる点で、日本人は同時代中国人より一日の長があると考えたこと。4：「古文辞」の習得は読むだけでは不十分で、模擬再生を行ってその文体を自由自在に操って、そこに自己の経験を流し込むことができねばならないと主張したこと。このような荻生徂徠の思想が形成された契機の一つが長崎唐通事の「崎陽の学」であったのである。これは、琉球・長崎に共通する異言語習得の方法論であり、荻生徂徠の原典習得の方法は、これら通事と共通の同時代性を有していたと見なすことができる。成果は「雑誌論文」として公開予定である（関連研究成果「学会発表」）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

木津祐子、荻生徂徠と「崎陽之學」 異言語理解の方法を巡って、『日本中国学会報』、査読有、第 68 集、2016（掲載予定）

木津祐子、『廣應官話』と乾隆年間の琉球通事、『中国語学研究 開篇単刊』、査読無、No.15 『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』、好文出版、2013、175-186

〔学会発表〕(計 10 件)

木津祐子、クレオール文学の担い手としての唐通事 - 長崎諸寺をどう語るか、台湾大学文学院日本研究センター・中央研究院合同国際学術研討会「黄檗宗と十七世紀の東亜文化交流」(国際学会) 2015 年 10 月 2 日・3 日、台湾大学文学院（台湾・台北）

木津祐子、18 世紀域外的「叙事」 - 以唐通事和荻生徂徠為例（中国語による発表）、中央研究院中国文哲研究所・東京大学東洋文化研究所合同国際シンポジウム「世界の中の中国明末清初」(国際学会) 2015 年 5 月 30 日・31 日、東京大学伊藤国際学術研究センター（東京）

木津祐子、非漢語圏における中国語白話文、第 60 回国際東方学者会議関西西部会（東方学会主催）招待講演（国際学会）2015 年 5 月 23 日、京都市国際交流会館（京都）

木津祐子、長崎の外から見る唐通事資料 - 本文の外から見る周辺資料、東西学術研究所「周縁資料による近代漢語研究の最前線」、2015 年 1 月 25 日、関西大学東西学術研究所（大阪）

木津祐子、訓讀的轉變與擴展 - 以江戸時代の崎陽之學和長崎唐通事為例（中国語による発表）、復旦大学中華文明国際研究センター第 17 回ワークショップ「日本“訓読”：その歴史及び変化」、2013 年 12 月 28 日、復旦大学中華文明国際研究センター（中国・上海）

木津祐子、琉球通事的正統與長期通事的忠誠 - 從兩地官話課本の文本談起（中国語による発表）、復旦大学中文系講演会、2013 年 9 月 25 日、復旦大学中文系（中国・上海）

木津祐子、寫本與官話 - 談談《琉球王國漢文文獻集成》所受的官話課本（中国語による発表）、復旦大学古籍研究所講演会、2013 年 9 月 8 日、中国・復旦大学古籍研究所（中国・上海）

木津祐子、想像中的中國 - 日本人翻譯中國風光和景物的歷史（中国語による発表）、復旦大学注か文明国際研究センター第 7 回ワークショップ「異域之眼：日本人對中國風景的想像與運用」、2013 年 8 月 30 日、中国・復旦大学中華文明国際研究センター（中国・上海）

木津祐子、琉球稿本『官音簡要』について、第五回国際訳学書学会、2013 年 8 月 4 日、京都大学人文科学研究所（京都）

木津祐子、『廣應官話』所反映の琉球通事學門體統以及現地化特點（中国語による発表）、第 7 回国際・第 12 回全国清代学術研討会（国際学会）2012 年 11 月 17 日～18 日、国立中山大学（台湾・高雄）

〔図書〕(計 5 件)

内田慶市・木津祐子・奥村佳代子、関西大学長澤文庫蔵琉球官話課本集、関西大学出版部、2015、363（25-39、142-208）

木津祐子 他、琉球通事的正統與長期通事の忠誠 - 從兩地「通事書」的差別談起、『翻譯與跨文化流動：知識建構、文本與文體的傳播』、台湾・中央研究院中国文哲研究所、2015、総 485 頁（339-369）

木津祐子 他、琉球稿本『官音簡要揀選六條』について、『高田時教授退職記念東方學研究論集』、臨川書店、2014、485（105-118）

中村春作・木津祐子 他、訓読から見なおす東アジア、東京大学出版会、2014、318

(110-122)

木津祐子、京都大学文学研究科蔵琉球写本
『人中畫』四卷付『百姓』,京都・臨川書店、
2013、総頁 798 頁

6 . 研究組織

(1)研究代表者

木津 祐子 (KIZU, Yuko)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号： 9 0 2 4 2 9 9 0